

令和4年度丹波の森大学講師紹介

(敬称略)

日時	講師・講義内容
<p>5月21日(土) 10時30分～12時 ※開講式10時～</p> <p>丹波の森公苑 多目的ルーム</p>	<p>角野 幸博 「森のくらしの最前線」</p> <p>森の恵みは、森の危害と隣り合わせにあります。農林業や森遊びの恵みとともに獣害や災害にも見舞われます。森のくらしは、人口減少や高齢化の最前線にあるとともに、森からの恩恵と危害の最前線にもあるのです。丹波の森ではこのことを意識しながら、集落の再生や生物多様性の保全など、様々な試みを積み重ねてきました。今さらなる一步を進めるために、集落再生と地域の拠点づくり、新たなワークライフネットワークの構築、移住者や他地域との協働など、丹波ならではの戦略を議論します。</p>
<p>公開講座</p> <p>6月18日(土) 10時～11時30分</p> <p>丹波の森公苑 多目的ルーム</p>	<p>小田切 徳美 「農山村からの地方創生」</p> <p>農山村はしばしば危機にあると言われていています。確かに、過疎化、高齢化の進展は地域を揺るがしています。しかし、その中で、地域内外の人々の協働による地域再生の動きも加速化しています。「地域づくり」と呼ばれ、都市の若者の田園回帰や関係人口などの援軍も見られます。地方創生のモデルは農山村にあると言っても過言ではありません。その本質は何でしょうか。全国の取り組みを紹介しながら、皆さんと考えたいと思います。</p>
<p>7月30日(土) 10時～11時30分</p> <p>丹波篠山市民センター</p>	<p>尾藤 環 「グリーン産業化を担う料理人と日本の職業教育の役割」</p> <p>国際社会ではポスト・コロナの経済戦略に「グリーン」を掲げ、持続可能なフードシステムへの移行が急速に進んでいます。日本の農林水産省も産業と地球環境との両立についての施策を掲げています。そのようななか、パンデミックで大きな打撃を受けた日本の飲食業や観光業がこの潮流をどう掴むのか？日本が国際社会をリードできる可能性とは？フードシステム上での料理人の役割や関連する教育機関の役割の変化、そして取り組んでいる実践を紹介します。</p>
<p>8月20日(土) 10時～11時30分</p> <p>丹波篠山市民センター</p>	<p>西野 桂子 「参加型で立ち向かう砂漠化」</p> <p>持続可能な開発目標(SDGs)のゴール15は「陸の豊かさも守ろう」です。世界では様々な環境危機が叫ばれていますが、砂漠化は多くの民にとって最も深刻な問題となっています。気候変動により降雨量が減り、土地が乾き、作物が育たなくなり、家畜が死に、民が環境難民になる問題です。今回はケニアの事例を取り上げ、人々が協力して植林を始めるにあたりどのような困難があったかを紹介し、木と人との関わりを一緒に考えます。</p>
<p>公開講座</p> <p>9月10日(土) 10時～11時30分</p> <p>丹波の森公苑 多目的ルーム</p>	<p>高田 和徳 「世界遺産になった縄文遺跡の縄文里山づくり －岩手県御所野遺跡－」</p> <p>岩手県北部にある御所野遺跡は縄文時代の中期の遺跡です。遺跡は馬淵川という大きな川沿いにありますが、発掘調査によって縄文人がつくりあげたと考えられる景観が少しずつ明らかになってきました。御所野縄文博物館ではこのような景観を縄文里山と呼び体験などを通してその復元に取り組んでいます。講義ではその活動を紹介します。</p>

日時	講師・講義内容
<p>11月5日(土) 10時～11時30分</p> <p>丹波の森公苑 多目的ルーム</p>	<p>稲田 純一 「“森のめぐみ”とランドスケープデザイン シンガポール・ガーデンシティの実践を通して」</p> <p>私ども人間は、“森のめぐみ”無くしては生存出来ないと言っても過言ではないと思われまます。</p> <p>赤道直下熱帯の気候に位置する都市国家シンガポール共和国は、1965年の独立建国以来ガーデンシティ構想を国のマスタープランとして緑の機能、恩恵を活用して都市環境の改善、都市景観の創造を実現してきました。2022年現在、独立建国以来半世紀を経過して、まるで“森の中に都市が存在している”ような都市国家を実現するに至っています。</p> <p>シンガポール政府内で1983年よりガーデンシティ構想の実現に関わってきました経験から、如何にしてガーデンシティ構想を実現して来たかをご紹介します。</p> <p>また、高知県立牧野植物園のリニューアル計画や中国大連市の英歌石植物園整備計画、兵庫県フラワーセンターリニューアル計画など、実際に関わりましたランドスケープデザイン計画につきましてもその経緯の一部をご紹介します。</p>
<p>11月19日(土)</p> <p>淡路島</p>	<p>現地学習 兵庫県立淡路夢舞台温室 あわじグリーン館ほか</p> <p>日本最大級の温室を見学します。昨年、兵庫県立淡路夢舞台公苑温室が装いを一新し「あわじグリーン館」として開館しました。メイン展示室「にぎわいのにわ」は、成長する植物の「ガーデンキャッスル」がシンボルとして立ち、植物を身近に感じられる工夫が演出されています。</p> <p>また、淡路島は古代から豊かな食材の宝庫であり「御食国」と呼ばれています。</p> <p>現地学習では淡路島の自然と歴史、食の恵みを体感する機会とします。</p>
<p>12月17日(土) 10時～11時30分</p> <p>丹波の森公苑 多目的ルーム</p>	<p>アンナ・シュラーデ 「森を愛する＝森を利用する ～ドイツ人はなぜ森を愛するのか～」</p> <p>第二次世界大戦後、都市化が進む中、ドイツの森林はその規模と人気を高めてきました。なぜドイツ人は森を愛するのでしょうか？ ドイツはどのようにして、人々が森に脅かされることなく、森から恩恵を受けるようにしているのでしょうか。</p> <p>この講義では、環境、公共のレクリエーション、行政の財政を支えるドイツの責任ある林業という概念に注目したいと思います。</p> <p style="text-align: right;">※講義は日本語です</p>
<p>令和5年 1月14日(土) 10時～11時30分 ※閉講式11時30分～</p> <p>丹波の森公苑 多目的ルーム</p>	<p>岩槻 邦男 「森、みどり、人 -- 森の恵みを識る --」</p> <p>新人はアフリカで森から出て、文化を創造しました。ユーラシア大陸に移ってからは、森の恵みも利用しながら、野生との訣別を始めました。日本列島にたどり着いた人は、列島の豊かなみどりと共生する生き方をつくり上げました。それぞれの地域の人の歴史は、その地域の社会を取り巻く自然環境との相関のもとで育てられました。全地球人が地球規模で生きる今、森の恵みと人の文化の多様性について考えてみましょう。</p>